

第5講:「元の理」と福祉思想

おやさと研究所元研究員

八木 三郎 Saburo Yagi

はじめに

「元の理」に関する文献の1つに、中山正善2代真柱の『こふきの研究』がある。その中に、

教祖から“こふきを作れ”とのお話を頂いて、山澤良助さんが筆を執ってお目にかけた。しかし、教祖はそれでよいとは仰せられなかった…(7頁)

“それでよい”と仰せにならなかった点が…お話全體が間違っているのか、部分的に思召に叶わなかった点があるのか、それとも不明なのであります。(10頁)

と記されている。教祖が“それでよい”と仰せにならなかったのは何故なのか。山澤良助氏の『和歌體こふき本』(明治14年本)を題材に、福祉思想の観点から検証した。

「福祉思想」の定義

ここでいう「福祉思想」とは、社会福祉の根幹にある考え方の1つである「社会的障壁の除去」をいう。人生を歩むお互い一人ひとは、さまざまな困難によって生きづらさを余儀なくされることがある。生きる上での困難は病、事故、貧困などの個人因子によるものだけではなく、社会のありようも深く関係している。その環境因子が人々の生活を安寧に導くこともあれば、逆に困難をより拡大させることもありえる。その個人と社会との関係性で生ずる障壁(負の環境因子)には、「事物」「慣行」「制度」「観念」などがある。「事物」とは、社会構造上の障壁を意味し、「慣行」は長年の因習・習慣などである。「制度」は法律・規範における障壁を言い、「観念」は人々のネガティブ思考、排他的捉え方を意味する。

今回の講座では、この社会的障壁の観点から現代社会の実態を紹介した。「事物」については、「自助」に力点が置かれる近年、「セルフサービス」が日常生活に普及することによって、自力でできない者にとって困りごとが拡大しているのである。個人因子もさることながら、環境因子が更に困難を強いる事例である。「慣行」では、「大相撲舞鶴場所」で土俵上で倒れた舞鶴市長に心臓マッサージの救命処置をしている女性看護師に対して、古来よりの因習を優先させ、「女性は土俵から降りてください」とアナウンスが流れたのである。わが国の長い歴史の中で女性に対する差別的意識、扱いが今なお存在する実態を紹介した。

人々の生きる力を社会の障壁によって押しつぶす社会のありようは等閑視してはならない。どんな環境、社会の中で生きるのかによって、困難のありよう、人生の歩みも大きく異なってくるのである。仏法見立て

山澤良助氏が執筆した『和歌體こふき本』は全部で161首のお歌でまとめられている。その中に「仏法見立て」によるお歌が登場する。(太字は筆者が強調)

130. くもよみのみことさまのかりものや
これでごりんとごたいとゆなり
132. これこそハなむあみだぶと六だいや
つなるかみさまたいしよくてん
136. 辰巳いハくにさつちさまぶつぼふの
ふげんぼさつにだるまべんてん
137. 戌亥ハつきよみの神ぶつぼふの
はちまんぼさつしよとくたいし
138. ひがしいハくもよみの神ぶうぼふの
もんじゆぼさつりうをしんのふ
139. やくしさまくすりのしゆごすいしやも
しよもつもんじちゑもごしゆご
140. ひつじさるかしこねの神ぶうぼふの
だいにちさまにほふねんさまと

141. 丑寅ハたいしよくてんぼうぼふの

こくぞふぼさつみよけんさまに

142. きしぼじんはしづめさまとじゆらいと

あなたさまとハをなじこふなり

143. にしこそハをふとのべさまぶうぼふの

ふどヲみよをにこふぼふだいし

なぜ、こふき本に仏法見立てのお歌が出てくるのであろうか。

ここに登場した、「普賢菩薩」「達摩弁天」「八幡菩薩」「妙見様」「聖徳太子」「法然」「弘法大師」など、すべて仏教に関する用語である。神仏習合の意味やインド発祥の信仰も挙げられており、中には歴史上の人物も記述されている。私にはこのことが不思議に思えてならない。教祖の教えを仏法見立てで補完しているようにみえる。仏教伝来

仏教公伝は552年(欽明天皇13年)である。それ以前に伝来していた「道教」「儒教」とは大きく異なる思想である。仏教の受容に関しては、豪族同士の対立を生み、国を揺るがす大事件であった。その背景には、朝鮮半島との軋轢、頻繁に起こる天変地異、蔓延する疫病など多くの諸難に対して、為政者は苦悩し、その救済を一心に仏教にすがったのである。

仏教の教えでは、生きることすべてが苦しみであり、人間は生まれ変わり、出変わりを続ける「輪廻転生」の存在である。そして前世、現世、来世の三世にわたっての生きざまの結果が「因果応報」として、生まれ変わる世界(天上、人間、修羅、畜生、餓鬼、地獄)が決まるとしている。その苦しみから逃れるには仏にすがり、「解脱」することであると説いた。また、戒律としては「殺生」を戒めている。この罪を犯せば、死後は「無間(阿鼻)地獄」に墮ちるとしている。

また、すべての人が成仏できることを説きながらも、「変成男子」「女人五障」という言葉も存在する。女性には5つの障りがあり、「梵天王、帝釈天、魔王、転輪聖王、仏」など崇高な存在になることができず、そのため男子に生まれ変わる必要があることを説いているのである。

先述した「社会的障壁」の部分で「女性は土俵から降りてください」という言葉も、古来よりわが国に存在する女性に対する「不浄観」によるものであり、これも仏教の教えに由来するものである。女性への蔑視、差別的な捉え方が今なお、「社会的障壁」として残っている。

まとめ

日本文化の源流を歴史的史実から鳥瞰する限り、わが国は古来に伝来した大陸文化によって国が構築され、その社会システムのなかで負の思想も形成されたといっても過言ではない。「男尊女卑」「穢れの観念」「貴賤の思想」などそれぞれの時代での「社会的障壁」を生み出している。人々の思想をコントロールし、社会を統制して国家を統治してきた。

天保9年10月26日「月日のやしろ」となられた教祖は、親神の教えを口に、筆を通してご教示くださった。それらをまとめるように、「こふきを作れ」と取次の人たちに言われたものの、出来上がった内容は当時の人たちが理解できるよう「仏法見立て」で補完したものであった。

しかし、教祖は当時の社会体制におけるさまざまな偏見を「おふでさき」などで、悉く否定されているのである。

[参考文献]

中山正善『こふきの研究』道友社、1957年。

此村庄助『因果經和讃』此村欽英堂、1911年。

竹内靖一『石門心学の経済思想:町人社会の経済と道德』ミネルヴァ書房、1962年。

大角修訳・解説『全品現代語訳法華経』角川文庫、2018年。